

長南町川島遺跡

— 一般国道409号茂原一宮道路国道道路改築事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

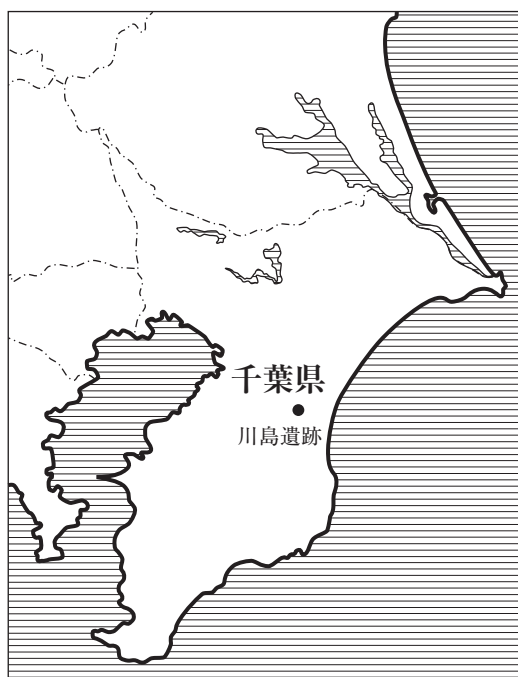
平成28年12月

千葉県教育委員会

ちょうなんまちかわしまいせき

長南町川島遺跡

— 一般国道409号茂原一宮道路国道道路改築事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —



序 文

いにしえより温暖な気候に恵まれた千葉県には、先人たちの生活の痕跡などが埋蔵文化財包蔵地（遺跡）として数多く残されています。これらの埋蔵文化財は県民共有の財産として、地域の歴史や文化の解明に欠かすことのできない貴重なものです。

千葉県教育委員会は、埋蔵文化財の調査研究・文化財保護思想の普及などを目的としたこれまでの諸活動に加え、平成25年度から千葉県が行う開発事業にかかる発掘調査や調査成果の整理、報告書の刊行について直接実施することとしました。

本書は、千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第16集として、一般国道409号茂原一宮道路国道道路改築事業に伴って実施した長南町川島遺跡の発掘調査報告書です。今回の調査では、縄文時代の陥穴、古墳時代後期後半から奈良時代の竪穴住居跡2軒と土坑4基が検出されました。調査事例の少ない当地域にとって、古墳時代後期から奈良時代にかけての集落の様相を知る上での貴重な資料を得ることができました。

刊行にあたり、本書が学術資料としてだけでなく、郷土の歴史に対する興味を深めるための資料として多くの方々に広く活用されることを期待しております。


最後に、発掘調査から整理作業を通じ、地元の方々をはじめとする関係者の皆様や関係諸機関には多大な御協力をいただきました。心から感謝申し上げます。

平成28年12月

千葉県教育委員会
文化財課長 永沼 律朗


凡 例

- 1 本書は、千葉県県土整備部長生土木事務所による一般国道409号茂原一宮道路国道道路改築事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 本書は、下記の遺跡を収録したものである。
川島遺跡 長生郡長南町坂本522ほか（遺跡コード427-007）
- 3 千葉県県土整備部の依頼を受け、千葉県教育庁教育振興部文化財課が平成25年度と平成27年度に発掘調査を実施し、平成28年度に整理作業を実施した。
- 4 調査組織及び発掘調査と整理作業の期間・担当者等は、第1章第1節に記した。
- 5 本書の執筆・編集は主任上席文化財主事 金丸 誠が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、長南町教育委員会、千葉県県土整備部道路整備課、同長生土木事務所ほか多くの方々から御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地図の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 8 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第1・2図 長南町発行 1/2,500 長南町管内図平成元年を編集
第3図 国土地理院発行 1/25,000 地形図「鶴舞」「上総一宮」平成22年を編集
第4図 参謀本部陸軍測量局作成 1/25,000 「迅速測図－上総一宮」を編集
- 9 図版1の航空写真は、京葉測量株式会社による平成28年撮影のものを使用した。
- 10 各表中の（ ）は推定数値、< >は現存数値を表わす。
- 11 遺構や遺物の図面に使用したスクリーントーンの用例は次のとおりである。

 カマド構築材

 焼土

 黒色処理

 須恵器断面

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	事業の経緯と経過	1
2	調査の方法と経過	2
第2節	遺跡の位置と環境	2
1	遺跡の位置と地形	2
2	川島遺跡の調査歴	5
3	周辺の遺跡	5
第2章	調査の成果	9
第1節	概要	9
第2節	検出した遺構・遺物	9
1	竪穴住居跡	9
2	土坑・陥穴	13
3	遺構外出土遺物	14
第3章	総括	15
	報告書抄録	巻末

挿図目次

第1図	遺跡周辺地形及びグリッド配置	3	第7図	SI002	12
第2図	調査区及びトレンチ配置	4	第8図	SK001	13
第3図	遺跡の位置と周辺の遺跡	6	第9図	12J・12Kグリッド周辺	
第4図	迅速測図	7		遺物出土状況	14
第5図	遺構分布	10	第10図	遺構外出土遺物	14
第6図	SI001	11			

表目次

第1表	遺構一覧表	17	第3表	石製品計測表	17
第2表	土器観察表	17	第4表	銭貨計測表	17

図版目次

図版1	航空写真	図版4	平成27年度調査区・SI001・SI002
図版2	遺跡遠景	図版5	SI001・SI002・SK001
図版3	平成25・27年度調査区	図版6	出土遺物

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 事業の経緯と経過

一般国道409号茂原一宮道路（長生グリーンライン）は、長南町、茂原市、陸沢町及び一宮町を結ぶ地域高規格道路で、外房地域の地域振興などにとって重要な道路と位置付けられている。そのため国土交通省が、この道路を東京湾アクアラインと一体として整備を進めている首都圏中央連絡自動車道（圏央道）に茂原長南インターチェンジで接続させ、より広域的な交通ネットワークの形成を図るなど整備計画を進めているところである。

この整備計画の実施にあたり、平成14年3月に千葉県長生土木事務所長から事業地内の長南町坂本地先における「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が千葉県教育委員会へ提出された。千葉県教育委員会では現地踏査などの結果を踏まえ、平成14年4月に事業計画地内に埋蔵文化財包蔵地（川島遺跡）が存在する旨の回答を行った。

この回答を受けて、その取扱いについて関係諸機関で協議を重ねた結果、事業の性格上やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、千葉県教育委員会が発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は調査対象面積10,750㎡について平成25年度（3,000㎡）と平成27年度（7,750㎡）に実施し、整理作業は平成28年度に実施した。各年度の調査組織及び担当者・期間・内容は次のとおりである。

○平成25年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 湯浅 京子 発掘調査班長 蜂屋 孝之

担当者 主任上席文化財主事 半澤 幹雄

期 間 平成26年1月6日～3月3日

内 容 確認調査 上層336㎡／3,000㎡ 本調査276㎡

○平成27年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 永沼 律朗 発掘調査班長 蜂屋 孝之

担当者 主任上席文化財主事 糸原 清

期 間 平成27年10月26日～11月13日

内 容 確認調査 上層1,500㎡／7,750㎡

○平成28年度

千葉県教育庁教育振興部文化財課

文化財課長 永沼 律朗 発掘調査班長 田井 知二

担当者 主任上席文化財主事 金丸 誠、文化財主事 松浦 誠、文化財主事 川田 航平

内 容 水洗・注記～報告書刊行

2 調査の方法と経過

発掘調査（第1・2図、図版3・4） 発掘調査にあたっては、公共座標（世界測地系）に基づいてグリッドを設定した。川島遺跡全体をカバーするように、 $X = -67.50$ 、 $Y = 39.80$ を起点に $20\text{m} \times 20\text{m}$ の方眼網を設定し、大グリッドとした。名称は北から南へ1・2・3……、西から東へA・B・C……とし、大グリッドを $2\text{m} \times 2\text{m}$ の小グリッドに100等分し、北西隅を00、南東隅を99とした。小グリッド名はそれらを組み合わせて12K-01などと表記することとした。

平成25年度は、概ねKグリッドから東側の $3,000\text{m}^2$ を調査対象として確認・本調査を実施した。上層の確認調査は、対象面積の10%を目安に行うこととしたが、急斜面部にトレンチを設定することは不可能であると判断し、平坦部を中心として、傾斜に沿ってトレンチ1～7を設定した。そのうちトレンチ1～4については、斜面の下方向にトレンチを追加し、それぞれトレンチ1b～4bとした。トレンチを設定できない急斜面部については、事前の立木伐採や進入路整備作業に際して担当職員が立ち会い、横穴墓の存在も想定しながら注意深く作業を進めたが、遺構・遺物は確認できなかった。確認調査の結果、トレンチ3・4で竪穴住居跡2軒が検出されたことから、これらの遺構の周囲 276m^2 を本調査の対象とすることとなった。下層の確認調査については、すべての上層確認トレンチでローム層の堆積が認められなかったことから調査不要とした。遺構名称の略号は、竪穴住居跡をSI、土坑をSKとし、遺構種類ごとに3桁の通し番号を付けて遺構番号とした。出土遺物は遺構ごとに4桁の通し番号を付けて取り上げた。記録作成は従来からの手実測による平板測量・遺構断面図の作成を行った。写真撮影は35mmモノクロ、120mmモノクロ、35mmカラーリバーサルフィルムカメラ、デジタルカメラ（JPEGデータ）により実施した。

平成27年度は、平成25年度調査区の西側 $7,750\text{m}^2$ を調査対象として確認調査を実施した。上層の確認調査については、調査区は緩斜面部が狭く痩せ尾根筋が続くことから、急斜面部を除く $1,500\text{m}^2$ について、すべての表土を除去して確認することとした。急斜面部については、平成25年度の発掘調査と同様に事前の伐採や進入路整備作業に担当職員が立ち会い、横穴墓の存在も想定しながら遺構の有無を確認したが、遺構は確認できなかった。また、下層については、平成25年度の調査成果から調査不要とした。確認調査の結果、遺構が検出されなかったことから確認調査で終了した。記録作成は、平成25年度と同じ機器などを使って実施した。

整理作業 整理作業は出土遺物の水洗・注記作業を行った後、遺物を遺構ごとに種別・器種分類してから接合・復元作業を実施し、実測・拓本作業を行った。発掘調査で作成した遺構図面・写真などの記録整理の後、挿図・写真図版原図を作成し、トレースや写真補正などを行い、写真図版についてはデジタル作成した。その後、原稿執筆・編集・校正作業を経て、この度報告書刊行となった。また、報告書編集に報告書に基づいた収納整理作業も併せて実施した。

第2節 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置と地形（第3・4図、図版1・2）

川島遺跡が所在する長南町は、千葉県のはほぼ中央に位置する。地形は、房総丘陵と西から東に向かって太平洋に注ぐ一宮川とその支流である三途川、鶴枝川、埴生川によって形成された谷底平野からなっている。埴生川の最上流部にあたる長南町と市原市との行政区境は分水嶺となっており、市原市側では東京湾に注ぐ養老川の支流である平蔵川が東から西に向かって流れている。

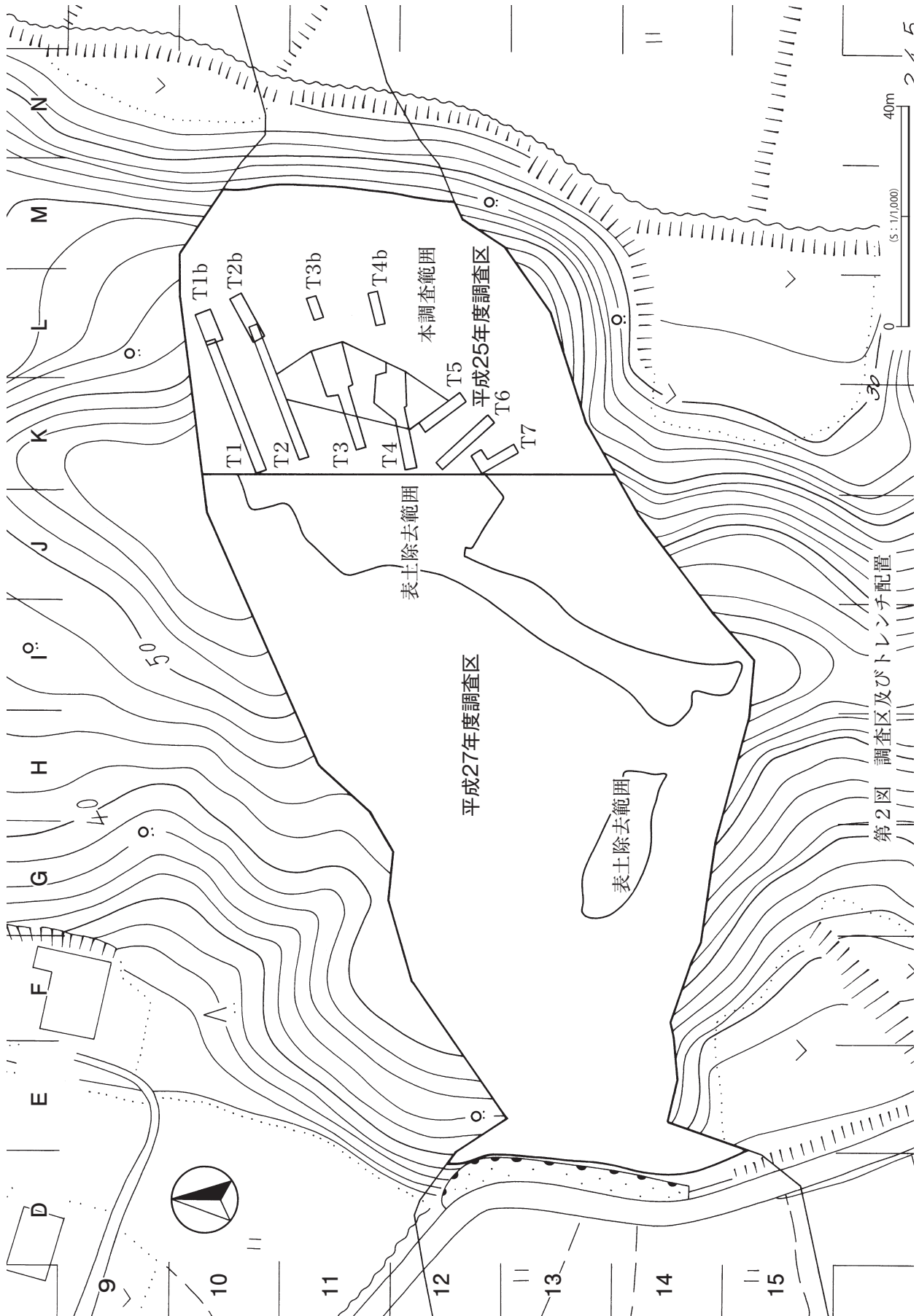


平成7年度
(財) 長生郡市文化財センター調査

川島遺跡

事業範囲

第1図 遺跡周辺地形及びグリッド配置



第2図 調査区及びトレンチ配置

川島遺跡（1）は茂原市に近接した鶴枝川の右岸にあり、鶴枝川に向かって南から北に細長く伸びる痩せ尾根の先端部分にあたる。標高は尾根上の平坦部分で54m～60mを測り、現水田面との比高は33m～37mである。この尾根は、南に350mほど行くと、埴生川に向かって細長く伸びる痩せ尾根へと続く。現在では、周辺の尾根の一部が土砂採取などによって、本来の地形が改変されているが、第4図の迅速測図をみると、川島遺跡のある丘陵の先端部に位置する山王祠（現在の坂本神社）を通り、途中で尾根筋に登り給田村に至る道があったことがわかる。この道の途中にある鶴枝川と埴生川とを分ける東西方向に走る尾根筋は、長南町合併前の旧長南町と旧東村との行政境となっていた。今回の調査区は、この痩せ尾根を横断する形となっており、遺構は標高56m前後の東向き緩斜面で検出した。

2 川島遺跡の調査歴（第1図）

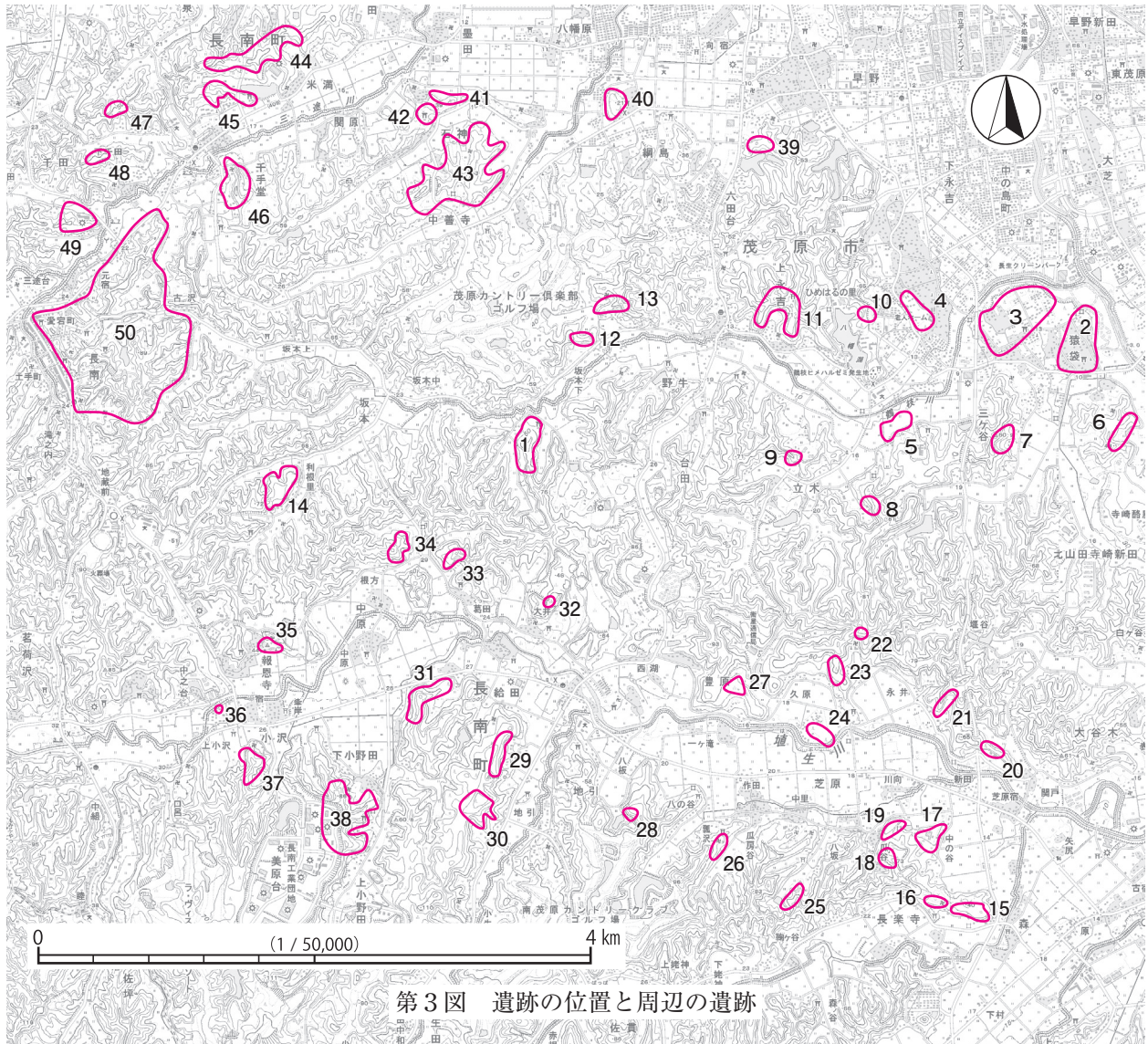
墓地造成に伴う調査が、平成7年度に財団法人長生郡市文化財センターにより実施されている¹⁾。対象地域は今回の調査地点から北に120mほど離れたI4～I5-39グリッドの位置で、標高34m～35mの尾根の最先端部にあたる。今回の調査地点と比べると21mほど低い。483㎡の本調査が実施され、その結果、竪穴住居跡4軒、土坑10基、溝1条などが検出された。竪穴住居跡はいずれも古墳時代後期以降のもので、そのうちの3軒については、出土遺物から7世紀後半代、8世紀、9世紀後半とされている。

3 周辺の遺跡（第3図）

発掘調査が行われている遺跡は少なく、埋蔵文化財分布地図など²⁾を参考にして概観していくことにする。旧石器時代の遺跡は、長南町を含む長生郡域の大部分の地域が急峻な房総丘陵と、一宮川とその支流によって形成された沖積地であることから、今のところ、茂原市北部と長柄町北西部の北総台地の南端地域にのみ所在が確認されている。主な遺跡としては、茂原市内野第I・II遺跡³⁾や同神田山第III遺跡³⁾、長柄町針ヶ谷遺跡⁴⁾や美佐子台遺跡⁵⁾などがある。

縄文時代以降の遺跡については、一宮川の支流である鶴枝川、埴生川、三途川流域ごとに概観していくことにする。川島遺跡がある鶴枝川流域は、一宮川との合流域の沖積地に面した砂丘及び丘陵低位面上に集落跡の存在が知られている。茂原市中原遺跡（2）⁶⁾は縄文時代前期・後期の遺物が出土し、主体となる古墳時代前期と古墳時代後期（7世紀代）～奈良・平安時代（9世紀代）の竪穴住居跡が31軒検出され、当該時期の集落を研究するうえでの重要な資料となっている。その周辺には弥生時代や古墳時代後期、奈良・平安時代などの集落跡あるいは包蔵地として、茂原市西若宮原遺跡（4）⁷⁾や日ノ宮遺跡（3）⁸⁾などがある。鶴枝川の中・上流域となる長南町では谷底平野がさらに狭くなり、集落跡は本遺跡のほかには知られていない。茂原市から長南町にかけての中流域の左岸丘陵斜面には長南町法華谷東横穴群（12）⁹⁾、法華谷西横穴群（13）⁹⁾など多くの横穴群がある。城跡としては、中流域の茂原市上永吉城跡（11）¹⁰⁾と下流域の長南町利根里城跡（14）¹⁰⁾が知られている。

鶴枝川の南側にあたる埴生川の流域は、長南町内でも鶴枝川流域と比べて谷底平野が広く、遺跡の数も多い。下流域の丘陵裾の沖積地と接する平地上にある根畑遺跡（17）¹¹⁾は、縄文時代早期・中期・後期の土器が出土しているほか、弥生時代中期～奈良時代の集落跡が検出され、特に古墳時代後期末と奈良時代（8世紀中葉）の竪穴住居跡が4軒ずつ検出されている。根畑遺跡に近接する台地上に、縄文時代中期、弥生時代中期、古墳時代中期の竪穴住居跡が検出された能満寺裏遺跡（16）¹²⁾や、前方後円墳を中心とし



- | | | | | |
|-----------|------------|------------|----------|-----------|
| 1 川島遺跡 | 2 中原遺跡 | 3 日ノ宮遺跡 | 4 西若宮原遺跡 | 5 立木遺跡 |
| 6 猿袋横穴群 | 7 三ヶ谷横穴群 | 8 立木横穴群 | 9 出口横穴 | 10 鏡谷横穴群 |
| 11 上永吉城跡 | 12 法華谷東横穴群 | 13 法華谷西横穴群 | 14 利根里城跡 | 15 能満寺古墳群 |
| 16 能満寺裏遺跡 | 17 根畑遺跡 | 18 瓜谷横穴群 | 19 下芝原城跡 | 20 木ノ村横穴群 |
| 21 永井横穴群 | 22 久原B横穴 | 23 久原A横穴 | 24 油殿古墳群 | 25 八坂横穴群 |
| 26 妙詮寺横穴群 | 27 峯台遺跡 | 28 八坂横穴 | 29 地引横穴群 | 30 三立谷館跡 |
| 31 城ヶ谷砦跡 | 32 小谷横穴 | 33 葛田B横穴 | 34 葛田A横穴 | 35 報恩寺横穴群 |
| 36 上小沢遺跡 | 37 小沢横穴群 | 38 根古屋城跡 | 39 早野横穴群 | 40 宮ノ台遺跡 |
| 41 宮島遺跡 | 42 石神貝塚 | 43 石神城跡 | 44 米満横穴群 | 45 豊栄館跡 |
| 46 猿千手堂城跡 | 47 三川谷横穴群 | 48 吹羅横穴群 | 49 井山横穴群 | 50 長南城跡 |

て構成される能満寺古墳群 (15)⁷⁾ があり、その対岸には油殿古墳群 (24)¹³⁾ がある。油殿古墳群に隣接する丘陵裾には、縄文時代中期・後期の土器が出土している峯台遺跡 (27)¹⁴⁾ がある。下流域～中流域の丘陵裾や河岸段丘上には、古墳時代前期・後期と奈良・平安時代、中世の集落跡が検出された上小沢遺跡 (36)¹⁵⁾ や、いくつかの土師器包蔵地がある。丘陵斜面には永井横穴群 (21)⁹⁾、小沢横穴群 (37)⁹⁾、地引横穴群 (29)¹⁶⁾ をはじめとする多くの横穴群があり、丘陵上には根古屋城跡 (38)¹⁰⁾ や城ヶ谷砦跡 (31)¹⁰⁾ などの城館跡がある。

鶴枝川の北側にある三途川の流域は、一宮川及び豊田川との合流域に広い沖積地を形成している。一宮川との合流域の台地上には、縄文時代中期～晩期の貝塚である茂原市石神貝塚 (42)¹⁷⁾ や弥生時代の標識遺跡として著名な宮ノ台遺跡 (40)¹⁷⁾ がある。石神貝塚と同じ丘陵の裾部にある宮島遺跡 (41)¹⁸⁾ では縄文時代早期・後期・晩期の遺物が出土しているほか、弥生時代中期・後期、古墳時代前期・後期、平安時代の竪穴住居跡や、平安時代の掘立柱建物跡と整地跡などが検出されている。また、宮島遺跡と小さな谷津を隔てた南側の台地上には石神城跡 (43)¹⁰⁾ がある。三途川の中流域は谷底平野が狭くなり、左岸の丘陵斜面には長南町米満横穴群 (44)¹⁹⁾ などの横穴群が数多くみられ、右岸の丘陵上には猿千手堂城跡 (46)¹⁰⁾ などの城跡が、さらに上流域の右岸には大規模な城域が想定されている長南城跡 (50)²⁰⁾ がある。

注1) 1996『千葉県長生郡長南町川島遺跡』(財)長生郡市文化財センター調査報告第29集

2) 1999『千葉県埋蔵文化財分布地図(3) -千葉県・市原市・長生地区(改訂版)-』(財)千葉県文化財センター調査報告第376集

2009『続 長南町史』長南町

3) 1990『千葉県茂原市桂遺跡群発掘調査報告書』(財)長生郡市文化財センター調査報告第8集

4) 2001『千葉県長生郡長柄町針ヶ谷遺跡』(財)総南文化財センター調査報告第43集

5) 1997『千葉県長生郡長柄町「サウザンドリーブスゴルフクラブ建設に伴う埋蔵文化財調査」報告書-美佐子台遺跡・倉沢台第Ⅱ遺跡・美佐子遺跡・亀ヶ谷遺跡・落井遺跡・上落井遺跡-』(財)長生郡市文化財センター調査報告

6) 1994『千葉県茂原市中原遺跡』(財)長生郡市文化財センター調査報告第25集

7) 1998『(財)総南文化財センター年報No.10-平成7年度・8年度-』(財)総南文化財センター

8) 1993『長生郡市文化財センター年報No.7-平成3年度-』(財)長生郡市文化財センター

9) 1974『東上総の社会と文化』上智大学史学会・史学研究会

10) 1991『長生の城』小高春雄

11) 2004『千葉県長生郡長南町根畑遺跡』(財)総南文化財センター調査報告第53集

12) 2003『千葉県長生郡長南町平成14年度能満寺裏遺跡調査概報』長南町教育委員会 ほか

13) 1990『房総考古学ライブラリー5古墳時代(1)』(財)千葉県文化財センター ほか

14) 1973『長南町史』長南町

15) 1988『千葉県長生郡長南町上小沢遺跡』(財)茂原市文化財センター調査報告第5集

16) 1979『千葉県文化財センター研究紀要4』(財)千葉県文化財センター ほか

17) 1986『ふるさと茂原のあゆみ』茂原市 ほか

18) 1995『千葉県茂原市宮島遺跡』(財)長生郡市文化財センター調査報告第26集

19) 1998『千葉県長生郡長南町米満横穴墓群』(財)総南文化財センター調査報告第38集

20) 2005『長南町長南城跡-一般国道409号(茂原一宮線)埋蔵文化財調査報告書-』(財)千葉県文化財センター調査報告第509集

第2章 調査の成果

第1節 概要 (第5図、図版4)

今回の発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居跡2軒、土坑4基、陥穴1基である。いずれも調査区東側の尾根上の東向きの緩斜面上にある。調査区の地山は、灰白色砂礫を含む淡い黄褐色シルト混じり粘質土であり、その上の堆積土は地山が土壌化した黄褐色シルト混じり粘質土である。遺構内の埋土はそれらに比べて少し暗色で、炭化物粒や焼土粒を含んでいる。このため、地山・堆積土・遺構内埋土が近似した土壌となっており、見分けが難しい状況であった。ローム層の堆積はなかった。

第2節 検出した遺構・遺物 (第6～10図、図版5・6)

1 竪穴住居跡

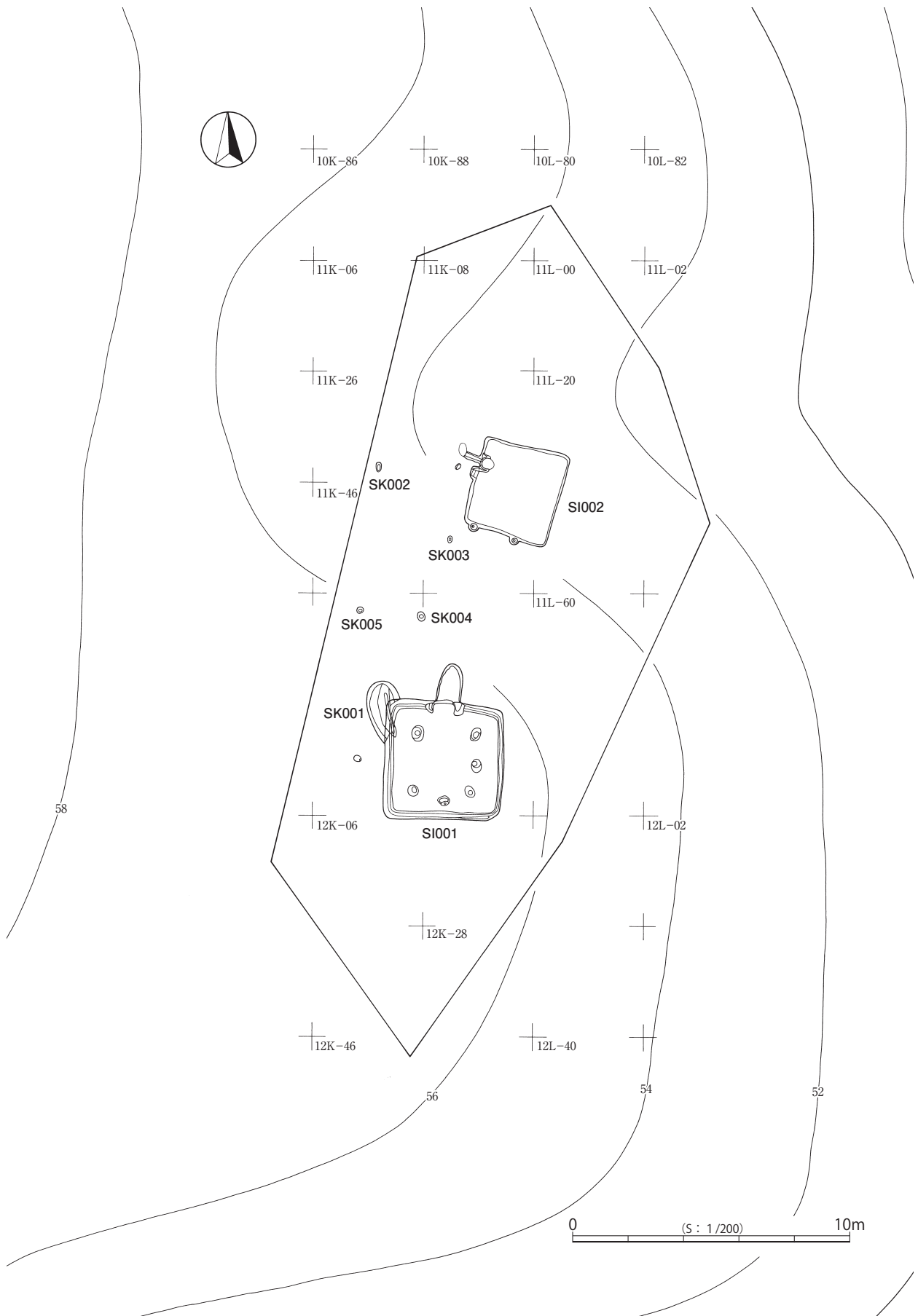
SI001 (第6図、図版5・6)

11K-87～89及び11K-97～99グリッドの位置にある。SK001の南東部分を壊して構築している。平面形はほぼ正方形であるが、東側が若干短くなっている。カマドが2基あり、西壁から北壁へと作り替えられている。また、それに呼応して、出入口ピットも東壁から南壁へと作り替えられている。壁溝や支柱穴には掘り直しなどの改変がみられないことから、規模の拡張や平面形の変更は行われていない。

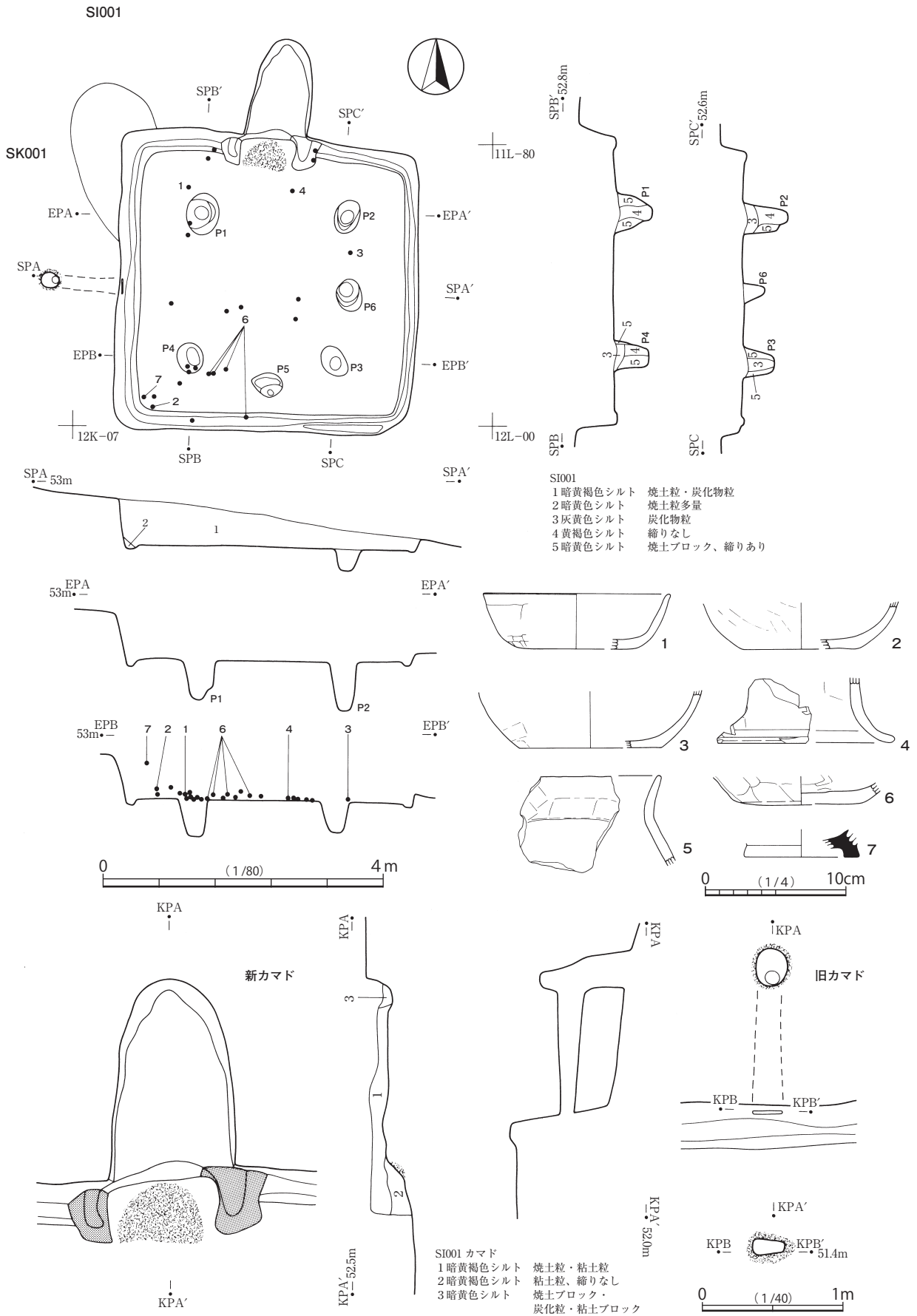
新しい竪穴住居跡の主軸方位はN-2°-Eである。支柱穴4本(P1～P4)と出入口ピット(P5)がある。規模は主軸長4.25m、西側の幅4.3m、東側の幅4.1mで、床面積は16.14㎡である。深さは西側65cm前後、東側15cm前後で、床面は平坦である。壁溝はカマドの下を除いてすべて巡り、深さは5cm前後である。支柱穴の平面形はいずれも楕円形で、深さはP2が70cm、P1・P3・P4が50cm前後である。出入口ピットは支柱穴より南壁寄りのほぼ中央部にあり、平面形は楕円形で、深さ20cmである。カマドは北壁の中央部に付設され、主軸方向に対して少し東にずれているが、北壁に対してはほぼ直角になっている。袖の構築材は粘土ブロックを含んだ黄色シルトで、両袖ともに壁から40cm～50cmほどしか遺存していない。火床部の一部が遺存し、焼土ブロックの堆積がみられた。奥壁は火床面から47°の角度で15cmほど立ち上り、煙道部はほぼ水平である。煙道部の平面形は長楕円形で、長さ1.3m、幅90cm、深さ15cm～20cmである。

古い竪穴住居跡の主軸方位はN-88°-Wである。出入口ピットは東壁沿いのP6で、支柱穴とほぼ同じ並びで東壁の中央部にある。平面形は楕円形で、深さ30cmである。カマドは西壁の中央部に付設され、煙道部だけが遺存し、長さは1.2mである。煙道部は、縦断面がL字形になるように地山をくり貫いて作られている。立坑の底面が横坑の底面より低いことから、立坑を先に掘り、そこに向かって床面から30cm上の場所からトンネル状に横坑を掘ったものと考えられる。横坑の正面形は長方形で、幅23cm、高さ8cm～12cmである。底部は水平で、天井部は立坑に向かって上がる。立坑・横坑の周囲は被熱し赤化している。

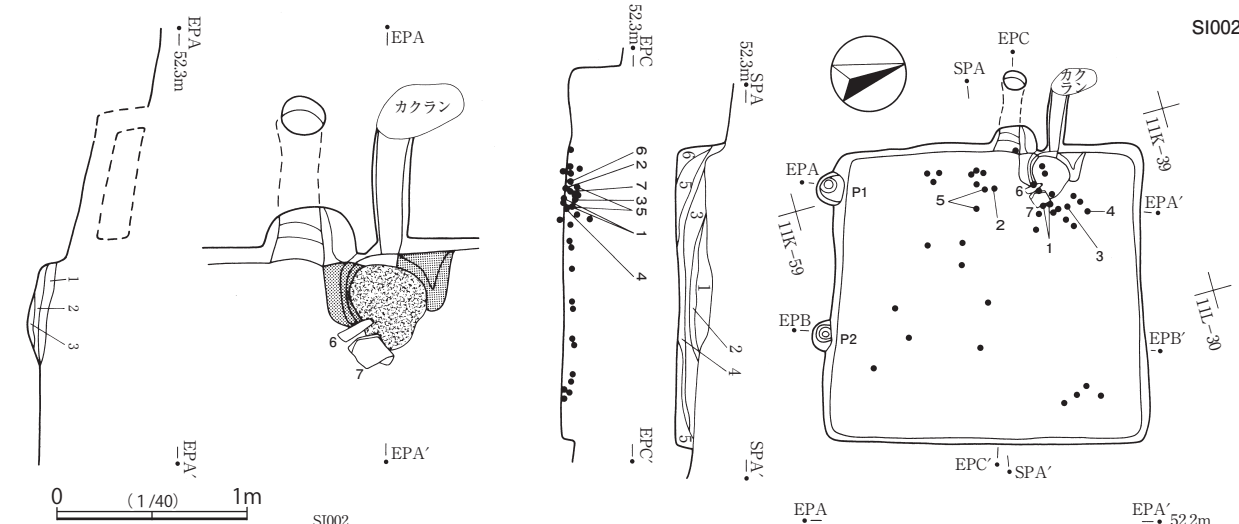
出土遺物の数量は少なく、すべて破片資料で、図示できたものは7点だけである。出土状況は特に集中している場所はなく、7の須恵器長頸壺を除いて床面に近い高さから出土している。1～3は平底の非口クロ土師器杯である。2・3も1と同様に、体部下端に丸みを持ち、口縁部は直線的に立ち上がるものと思われる。4は土師器高杯の裾部である。5・6は土師器甕である。7は須恵器長頸壺の高台部である。



第5図 遺構分布



第6図 SI001

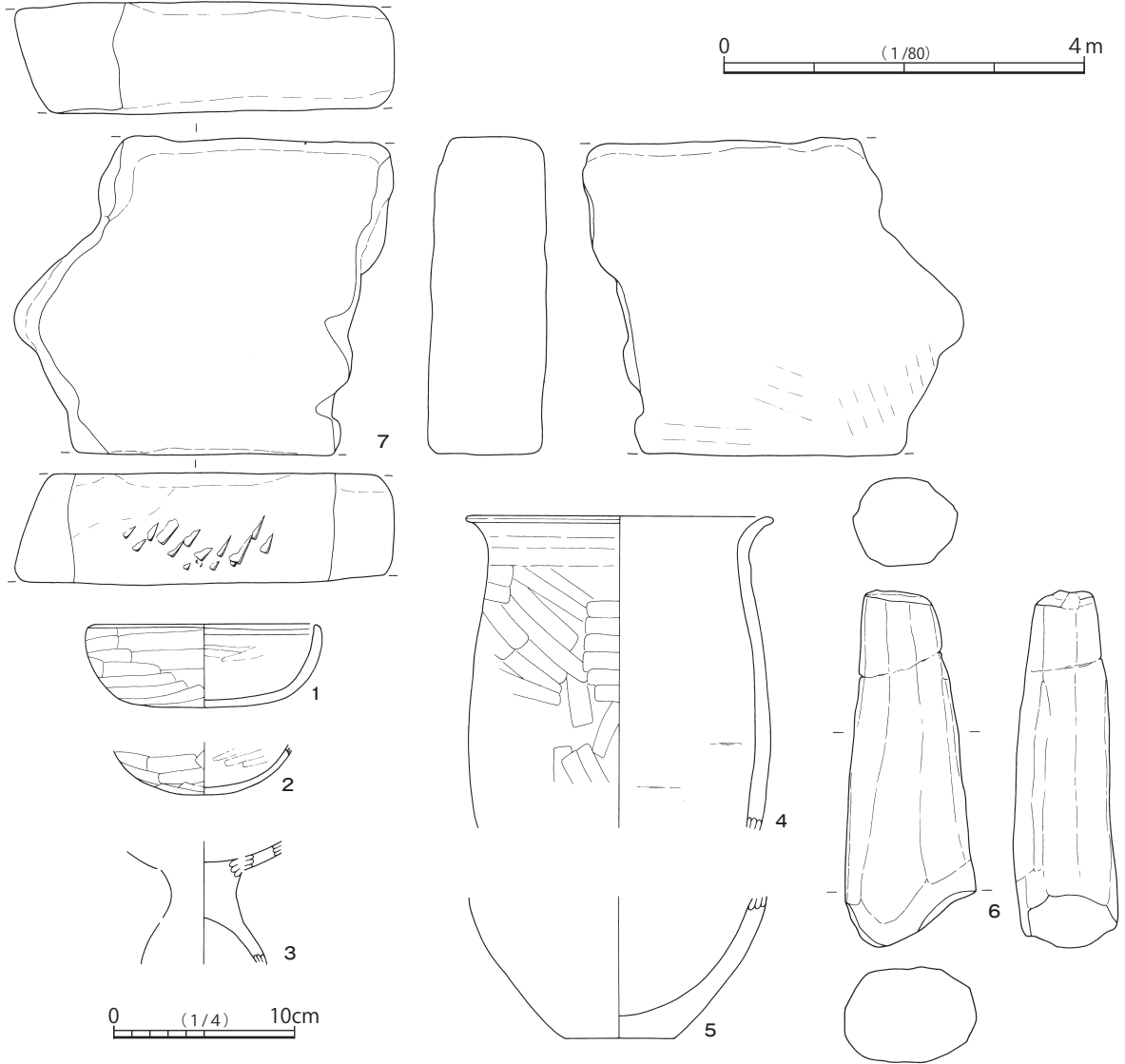
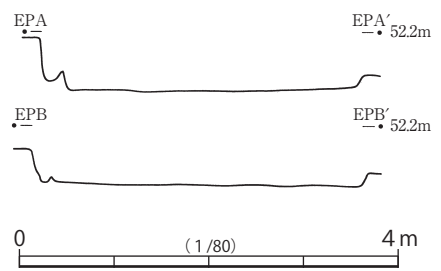


SI002 カマド
 1 褐色シルト
 2 暗黄褐色シルト
 3 黄褐色シルト

焼土ブロック多量
 焼土粒・炭化物粒少量
 焼土ブロック多量

SI002

1 暗黄褐色シルト 炭化物粒・焼土粒・黄色粘土粒
 2 灰黄褐色シルト 炭化物粒多量、焼土粒
 3 暗黄褐色シルト 炭化物粒・焼土粒、黄色粘土粒やや多量
 4 暗褐色シルト 炭化物粒多量、焼土粒やや多量
 5 黄褐色シルト 炭化物粒・焼土粒・黄色粘土粒・粘土ブロック
 6 暗黄色シルト 灰白色粘土ブロック多量



第7図 SI002

SI002 (第7図、図版5・6)

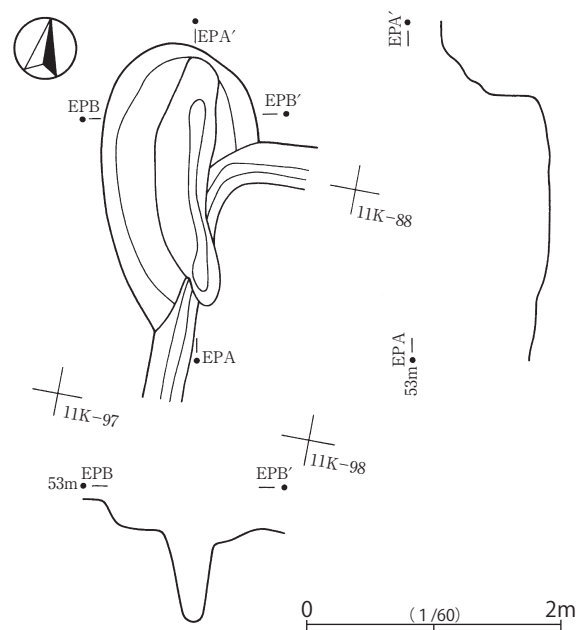
11K-39・49及び11L-30・40グリッドの位置にある。平面形は正方形で、主軸方位はN-74°-Wである。規模は主軸長3.2m、幅3.2mで、床面積は9.50㎡である。床面は平坦で、壁溝はない。主柱穴はなく、南側壁部分に壁柱穴が2本(P1・P2)ある。壁柱穴の確認面からの深さは、P1が45cmで床面より浅く、P2が36cmで床面とほぼ同じ深さである。カマドは西壁に付設され、作り替えが行われている。新カマドは、中央から70cm北に寄った場所に作られ、旧カマドの右袖と新カマドの左袖は同じ位置になっている。袖の構築材は粘土ブロックを含んだ褐色シルトで、両袖ともに壁から30cmほどしか遺存していない。火床部には焼土ブロックが堆積していた。煙道部は天井部が崩落し、立坑部分は攪乱を受けているが、SI001の旧カマドと同様に縦断面の形がL字形に地山をくり貫いて作られたものと思われる。奥壁は火床面から65°の角度で立ち上がり、火床面から15cmほど上の場所から12°の角度で煙道部を掘っている。煙道部の長さは、立坑部分が不明で、推定で80cmである。左袖側の火床部前面から凝灰岩製の支脚(6)と凝灰岩製のカマド構築材(7)が出土した。旧カマドは中央のやや北側に寄った場所に付設され、煙道部だけが遺存し、縦断面の形がL字形に地山をくり貫いて作られている。奥壁は床面から16°の角度で立ち上がり、5cmほど上の場所から横坑がやや下に向かって掘られている。煙道部の長さは80cmである。

出土遺物の数量は少なく、破片資料がほとんどで、図示できたものは7点だけである。出土状況はカマド周辺に集中し、比較的床面に近い高さから出土している。1・2は丸底の土師器杯で、1の底部は平底に近い形状で、2は小型の杯になると思われる。3は土師器高杯で、脚部はハの字に開くものと思われる。4・5は土師器甕である。6は凝灰岩から切り出された支脚で、全体の形状は八角錐状で、先端部は平坦で、下端部は欠失している。表面には面取り痕が明瞭に残り、全面被熱し赤化している。7は凝灰岩から切り出されたレンガ状のカマド構築材で、被熱し赤化している表面を上にして、ほぼ水平な状態で出土した。前後の両側面は加工面が残り、左右両側面は破損していた。裏面と側面の一部に工具痕と思われる痕跡がみられる。

2 土坑・陥穴

SK001 (第8図、図版5)

11K-77・87グリッドの位置にある。南東部分の底面から上の部分をSI001によって壊されている。平面形は底面の形状から長楕円形と推定され、主軸方位はN-19°-Wである。規模は、検出面で推定される主軸長は2.5mで、遺存部分での最大幅1.24m、同じく深さ1.1mである。主軸の両側は幅30cm前後のテラス状の段があり、底面に向かって幅が狭く、細長い形状となっている。底面の主軸長は1.5mで、幅は6cm~10cmである。遺構内や周辺からは遺物は出土していないが、検出状況・形状から縄文時代の陥穴と判断した。



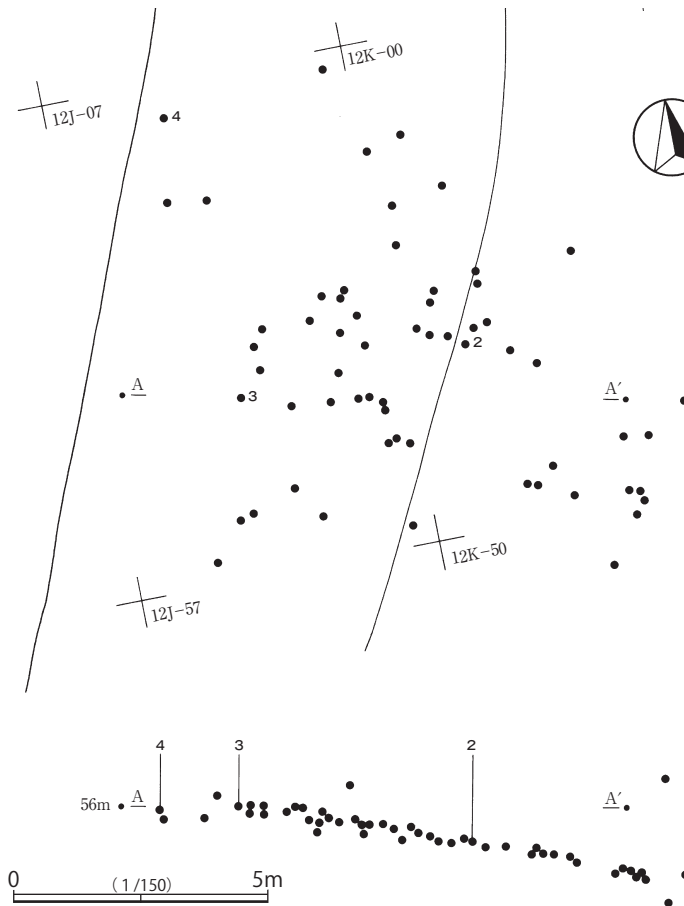
第8図 SK001

SK002 ~ 005 (第5図)

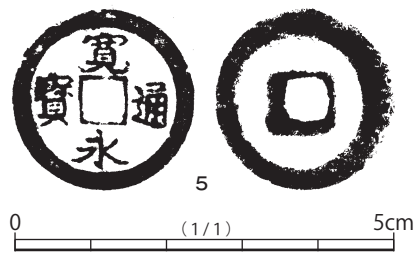
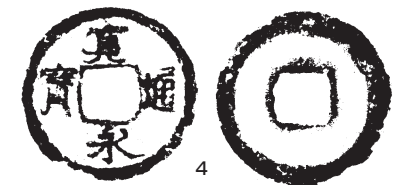
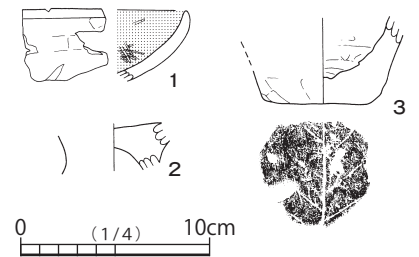
SK002は11K-37グリッドの位置にあり、長径40cm、短径20cm、深さ18cmである。SK003は11K-48・58グリッドの位置にあり、長径25cm、短径20cm、深さ18cmである。SK004は11K-67・68グリッドの位置にあり、長径40cm、短径30cm、深さ34cmである。SK005は11K-66グリッドの位置にあり、長径25cm、短径20cm、深さ18cmである。いずれも出土遺物はない。埋土の特徴がSI001やSI002に近似することなどから古墳時代後期以降の土坑と判断した。

3 遺構外出土遺物 (第9・10図、図版6)

ここでは、遺構外のグリッド・トレンチ出土の遺物を取り上げる。平成27年度調査時において12J-07~49及び12K-00~72グリッドの範囲で土師器などの散布がみられた。この地点には黄褐色シルト混じり粘質土の堆積がみられたが、精査した結果、遺構などは検出できなかった。また、出土標高も斜面に沿うように西から東に向かって低くなっている。出土遺物は小破片で摩耗しているものが大部分で、図示できたものは1~5である。1は平成25年度確認調査時のトレンチ1から出土した内面が黒色処理された土師器杯である。2は土師器高杯である。3はミニチュア土器で底部に木葉痕が残る。4・5は銭貨で、いずれも寛永通宝である。5は遺存状態が良く、文字や区画線などは明瞭である。裏側の縁と郭の幅は均一ではない。



第9図 12J・12K グリッド周辺遺物出土状況



第10図 遺構外出土遺物

第3章 総括

今回の発掘調査の結果、竪穴住居跡2軒と土坑4基、陥穴1基が検出された。陥穴は遺構の性格上遺物を伴っていないが、検出状況・形状から縄文時代のものと判断した。当地域の丘陵上においてその存在を確認できたことは、貴重な調査事例となった。土坑4基は出土遺物がないが、埋土の特徴がSI001・SI002と近似していることなどから古墳時代後期以降の時期と考えておきたい。

竪穴住居跡の出土遺物と遺構について、少し詳しくみていきたい。出土遺物については2軒とも数量が少なく、ほとんどが破片資料で、ともに中型のビニール袋で1袋程度しか出土していない。図示できた土器は土師器の杯と高杯、甕で、高杯と甕は全体を知ることができない。土師器杯は非ロクロであるが、SI001の杯は平底で、SI002の杯は椀形であるという違いがあるが、須恵器模倣杯とロクロ土師器杯はまったく出土していない。また、須恵器の出土は極めて希少であり、SI001の長頸壺(7)の高台部破片のみ出土し、遺構内を含めトレンチなどからも一切出土していない。平成7年度調査の3号・4号住居跡¹⁾と比べてみると、出土遺物の数量は極めて少なく、摩耗した破片資料が多いことなどから、両竪穴住居跡は意図的に土器などを残さず、また、投棄せずに埋め戻したと思われる。2軒の竪穴住居跡の時期については、土師器杯の様相から概ね古墳時代後期～奈良時代とすることができる。

当該時期の竪穴住居跡が検出されている周辺遺跡を概観すると、埴生川流域の長南町根畑遺跡²⁾は、弥生時代中期後半から奈良・平安時代まで断続的に営まれた集落跡であり、報告書の中で古墳時代後期から奈良時代の竪穴住居跡について、須恵器模倣杯を含まず半球形の丸底杯と小振りな平底杯で構成される竪穴住居跡群(4軒)と、平底の非ロクロ土師器杯のみで構成されている竪穴住居跡群(4軒)に区分し、前者を8世紀中葉、後者を7世紀後半の時期としている。一宮川と鶴枝川の合流域にある茂原市中原遺跡³⁾は、古墳時代前期と古墳時代後期～奈良・平安時代の集落跡であり、報告書の中で古墳時代後期の竪穴住居跡については、器高が低く小型化している須恵器模倣杯と椀形で内面に暗文が施される杯が主体となることなどから7世紀初頭～後半の時期としている。これは、さらに須恵器模倣杯が主体となるものと、椀形で内面に暗文が施される杯が主体となるものに区分することも可能と考えられる。また、奈良時代の竪穴住居跡については、非ロクロ土師器杯とロクロ土師器杯が共伴し、かつ非ロクロ土師器杯が主体を占めていることなどから8世紀代の時期としており、8世紀の第3四半期を中心とした時期と考えることができる。川島遺跡の平成7年度調査¹⁾では4軒の竪穴住居跡が検出され、報告書の中で、4号住居跡を小型化した椀形の土師器杯と湖西窯産の須恵器蓋により7世紀後半代に、2号住居跡を非ロクロの平底の土師器杯が出土していることにより8世紀前半～後半の時期としている。また、3号住居跡は、ロクロ土師器だけで構成されていることなどから9世紀後半の時期としている。

今回の調査で検出された2軒の竪穴住居跡の時期については、周辺遺跡の土器の様相などを踏まえ、椀形の土師器杯だけで構成されるSI002を古墳時代後期後半(7世紀後半)とし、平底の非ロクロ土師器だけで構成されるSI001を奈良時代前半(8世紀第2四半期)としておきたい。

遺構の特徴としては、竪穴住居跡はいずれも長い煙道部をもつカマドを作り替えており、SI001が旧カマド1.2mで、新カマドが1.3m、SI002が新旧カマドともに80cmである。SI001の新カマドを除く3基のカマドの煙道部は地山をくり貫いて作られている。また、SI002ではカマドの構築材として凝灰岩のレンガ

状の切り石が用いられていた。周辺の遺跡で煙道部が50cm以上のカマドや凝灰岩製のカマド構築材を用いる竪穴住居跡としては、川島遺跡の平成7年度調査¹⁾の4号が煙道部長1m、根畑遺跡²⁾の26号(奈良時代)が煙道部長60cm、中原遺跡³⁾ではいずれも古墳時代後期後半の竪穴住居跡で、15号が煙道部長77cmで軟質砂岩切り石を伴う、28号が煙道部の掘り込みはないがレンガ状の軟質砂岩の切り石を伴う、一宮川流域の長南町今泉遺跡⁴⁾では古墳時代後期後半の竪穴住居跡で、第003号が煙道部長70cmで凝灰岩の柱状製品を伴う、第004A号が煙道部の掘り込みはないが両袖に凝灰岩の柱状製品を伴う、第017号が煙道部長85cm、同じ一宮川流域の標高45m前後の台地上にある長柄町谷口遺跡⁵⁾の001号(古墳時代後期後半～奈良時代)が煙道部長1m、さらに、阿久川流域の標高13m～15mの丘陵裾部の微高地にある茂原市和合遺跡⁶⁾の016号(8世紀中葉～後半)が煙道部長50cmで岩ブロックを伴うことなどがあげられる。川島遺跡の報告書の中でも、泥質砂岩をカマド袖の芯にする構築材として用いることが当地域の特徴であると指摘している。長い煙道部をもつカマドは君津地域にも事例があることから、周辺地域も含めた広範囲にわたる資料の収集・検討が必要であるが、長い煙道部と凝灰岩の切り石をカマド構築材として用いることも当地域の特色の一つとしてあげておきたい。

最後に、平成7年度調査成果と今回の調査成果を含めた川島遺跡について概観する。今回の発掘調査は丘陵の緩斜面も含めた10,750㎡の範囲を実施し、標高56m前後の東向きの緩斜面から7世紀後半のSI002と8世紀第2四半期のSI001の2軒の竪穴住居跡を検出した。2軒とも竪穴住居の規模を変えずにカマドを作り替えていることから、ある程度の時間幅をもちながら竪穴住居が単独で継続的に営まれていたと考えられる。一方、平成7年度の発掘調査は、標高34m～35mの尾根の最先端部の比較的広い平坦面の一部(483㎡)を実施したことから、その周辺に遺構が広がることが予想される。しかし、検出された竪穴住居跡の時期が7世紀後半～9世紀第3四半期までの長い期間でありながら、それほど著しい遺構の重複がみられないことなどから、数軒程度の小規模な集落であった可能性が高い。両地点の標高差は21m～22mあるが、両者が無関係に存在していたとは考え難い。こういった状況を「共同体として規模の大きい集落を形成していても、居住者は一定範囲内のうち、居住に適した場所に分散するなど、地形的制約を踏まえた形態を採っている可能性」⁷⁾とみることもできる。しかし、今回の調査地点が居住に適していたとは思えない。第4図の迅速測図でみられる山王祠から給田村に向かう道に注目し、当時、この道は小規模な集落からすぐに丘陵上に登り尾根伝いに埴生川流域の集落などへ続いていたと想定してみたい。そのうえで、今回検出された竪穴住居は、隣接地域を結ぶ道の起点(終点)付近に設置された、何らかの機能(役割)をもった建物である可能性を提起しておきたい。

注1) 1996『千葉県長生郡長南町川島遺跡』(財)長生郡市文化財センター調査報告第29集

報告書の中で、3・4号住居跡ともに大型ビニール袋で6袋出土していると報告されている。

2) 2004『千葉県長生郡長南町根畑遺跡』(財)総南文化財センター調査報告第53集

3) 1994『千葉県茂原市中原遺跡』(財)長生郡市文化財センター調査報告第25集

4) 1990『千葉県長生郡長南町岩川・今泉遺跡』(財)長生郡市文化財センター調査報告第6集

5) 1996『千葉県長生郡長柄町谷口遺跡・吹良遺跡』(財)長生郡市文化財センター調査報告第32集

6) 1994『千葉県茂原市和合遺跡』(財)長生郡市文化財センター調査報告第23集

7) 2009『続 長南町史』長南町

第1表 遺構一覽表

遺構	種類	位置	主軸	長軸(m)	短軸(m)	床面積(m ²)	カマド位置	主柱穴	貯蔵穴	出入口	壁溝	時期
SI001	竪穴住居跡	11K-87	N-2°-E	4.30	4.25	16.14	西壁中央 北壁中央	4	無	東壁側 南壁側	全周	奈良時代前半
SI002	竪穴住居跡	11K-39	N-74°-W	3.20	3.20	9.50	西壁中央 西壁北寄り	無 壁柱穴2	無	無	無	古墳時代後期後半
SK001	陥穴	11K-77	N-19°-W	(2.50)	(1.24)	-	-	-	-	-	-	縄文時代
SK002	土坑	11K-37	楕円形	0.40	0.20	-	-	-	-	-	-	古墳時代後期以降
SK003	土坑	11K-48	円形	0.25	0.20	-	-	-	-	-	-	古墳時代後期以降
SK004	土坑	11K-67	楕円形	0.40	0.30	-	-	-	-	-	-	古墳時代後期以降
SK005	土坑	11K-66	円形	0.25	0.20	-	-	-	-	-	-	古墳時代後期以降

第2表 土器観察表

遺構	番号	種類	器種	法量 (cm)		遺存度	胎土	色調・焼成		技法		備考
				口径	底径			内面	外面	内面	外面	
SI001	1	土師器	杯	口径	(13.4)	全体20%	白色粒子少量	内面	橙 7.5YR7/6	内面	ナデ	
				底径	(8.9)			外面	橙 7.5YR7/6	外面	ヘラ削り後ナデ	
				器高	4.0			焼成	やや不良	底外面	ヘラ削り	
SI001	2	土師器	杯	口径	—	体部~底部 25%	砂粒少量	内面	明黄褐 10YR6/6	内面	ナデ	
				底径	(8.4)			外面	明黄褐 10YR7/6	外面	ヘラ削りの後ナデ	
				器高	(3.3)			焼成	不良	底外面	ヘラ削り	
SI001	3	土師器	杯	口径	—	体部~底部 20%	黒色粒子少量	内面	明褐 7.5YR5/8	内面	ナデ	
				底径	(10.0)			外面	明褐 7.5YR6/6	外面	ヘラ削りの後ナデ	
				器高	(4.0)			焼成	やや不良	底外面	ヘラ削り	
SI001	4	土師器	高杯	口径	—	裾部10%	黒色粒子少量	内面	明黄褐 10YR5/8	内面	ナデ	
				底径	—			外面	黒褐 10YR3/1	外面	ナデ	
				器高	(4.6)			焼成	やや不良	底外面	—	
SI001	5	土師器	甕	口径	—	口縁部破片	砂粒少量	内面	明赤褐 5YR5/8	内面	不明	器面の磨減が著しく調整 は不明瞭
				底径	—			外面	明赤褐 5YR5/8	外面	ヘラ削りの後ナデ	
				器高	(6.5)			焼成	不良	底外面	—	
SI001	6	土師器	甕	口径	—	底部60%	砂粒少量	内面	にぶい黄橙 10YR6/4	内面	ナデ	
				底径	9.0			外面	にぶい黄橙 10YR6/4	外面	ヘラ削りの後ナデ	
				器高	(2.1)			焼成	やや不良	底外面	ヘラ削り	
SI001	7	須恵器	長頸壺	口径	—	底部20%	白色粒子少量	内面	暗灰黄 25Y5/2	内面	回転ナデ	
				底径	(8.2)			外面	暗灰黄 25Y5/2	外面	回転ナデ	
				器高	(2.0)			焼成	良好	底外面	回転ナデ	
SI002	1	土師器	杯	口径	13.1	全体60%	精緻赤色砂粒 少量	内面	にぶい橙 7.5YR7/4	内面	ミガキ	
				底径	—			外面	にぶい橙 7.5YR7/4	外面	ヘラ削り	
				器高	4.6			焼成	良好	底外面	ヘラ削り	
SI002	2	土師器	杯	口径	—	底部60%	精緻赤色砂粒 ごく少量	内面	にぶい橙 7.5YR7/4	内面	ヘラナデ	
				底径	—			外面	にぶい橙 7.5YR7/4	外面	ヘラ削り	
				器高	(3.0)			焼成	良好	底外面	ヘラ削り	
SI002	3	土師器	高杯	口径	—	杯部~脚部 20%	やや粗砂粒	内面	橙 7.5YR7/6	内面	ヘラナデ	
				底径	—			外面	橙 7.5YR7/6	外面	ヘラ削り	
				器高	(6.9)			焼成	やや不良	底外面	—	
SI002	4	土師器	甕	口径	(17.1)	口縁部~胴部 30%	やや粗3mm台 の小石・砂粒	内面	にぶい黄橙 10YR7/4	内面	ヘラナデ	内面の一部に輪積み痕
				底径	—			外面	にぶい黄橙 10YR7/4	外面	ヘラ削り	
				器高	(17.4)			焼成	良好	底外面	—	
SI002	5	土師器	甕	口径	—	胴部~底部 20%	精緻赤色砂粒 少量	内面	明黄褐 10YR6/6	内面	ヘラナデ	内外面は摩耗が著しく調整 が不明瞭
				底径	6.2			外面	明黄褐 10YR6/6	外面	ヘラ削り	
				器高	(7.8)			焼成	やや不良	底外面	不明	
トレンチ1	1	土師器	杯	口径	—	口縁部~体部 破片	白色粒子少量	内面	黒 10YR2/1	内面	ヘラミガキ	内面黒色処理
				底径	—			外面	黒褐 10YR3/1	外面	ナデ	
				器高	(3.8)			焼成	やや不良	底外面	—	
12K	2	土師器	高杯	口径	—	杯部~脚部 20%	砂粒少量	内面	明黄褐 10YR6/6	内面	不明	内外面器面荒れ調整不明 瞭
				底径	—			外面	明黄褐 10YR6/6	外面	不明	
				器高	(2.5)			焼成	やや不良	底外面	—	
12J	3	ミニチュア土器	—	口径	—	底部100%体 部10%	砂粒やや多い	内面	赤褐 5YR4/8	内面	ナデ	鉢形
				底径	5.8			外面	赤褐 5YR4/8	外面	ヘラ削りの後ナデ	
				器高	(4.6)			焼成	やや不良	底外面	木葉痕	

第3表 石製品計測表

遺構	番号	種類	石材	最大長(cm)	最大幅・長径(cm)	厚さ・短径(cm)	重量(g)	備考
SI002	6	支脚	凝灰岩	(19.8)	7.3	5.2	557	全面被熱し赤化
SI002	7	カマド構築材	凝灰岩	(21.1)	17.6	6.4	1,848	裏面と側面の一部に工具痕 表面と片側側面は被熱により赤化

第4表 銭貨計測表

遺構	番号	銭貨名	初鑄年	計測値(mm)					重量(g)	備考
				縁外径	縁内径	郭外径	郭内径	縁厚		
12J	4	寛永通宝	1636	23.5	20.2	8.5	7.2	1.1	1.2	摩耗・錯により表裏面やや不鮮明
11J	5	寛永通宝	1636	24.2	19.5	7.5	6.2	1.2	2	遺存状態良好

写 真 图 版



川島遺跡

航空写真(S=約1/10,000)



遺跡遠景（東から平成 25 年度調査区）



遺跡遠景（北西から平成 27 年度調査区）



平成 25 年度調査区 (東から)



平成 27 年度調査区 (14 I から 13・14G 方向)



平成 27 年度調査区 (14 I から 12 J 方向)



SI001・002 (南西から)



SI001 (南から)



SI001 新カマド (南から)



SI001 (東から)



SI001 旧カマド (東から)



SI002 (東から)



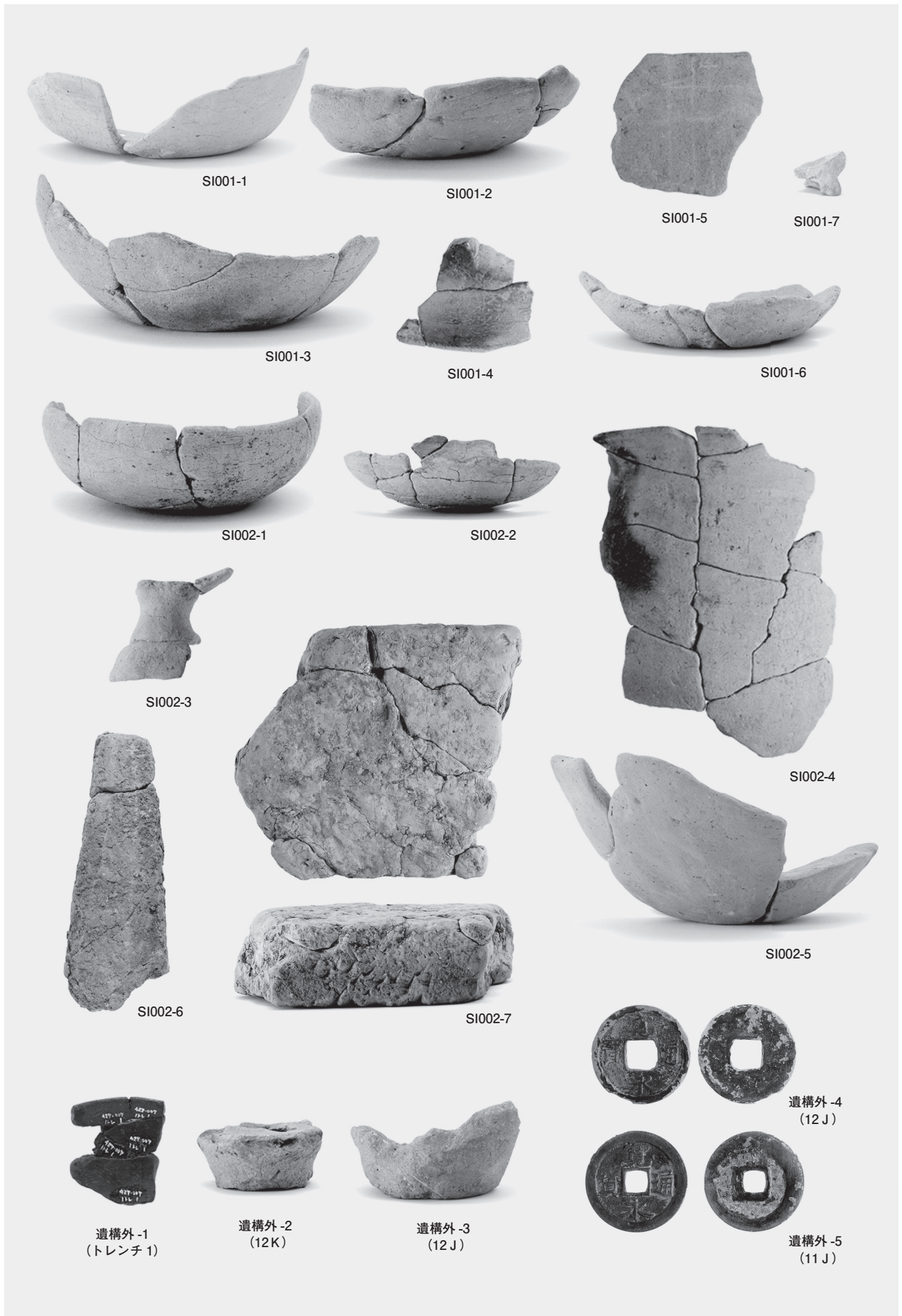
SI002 新旧カマド (東から)



SI002 カマド遺物



SK001 (南から)



出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちょうなんまちかわしまいせき							
書名	長南町川島遺跡							
副書名	一般国道409号茂原一宮道路国道道路改築事業埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第16集							
編著者名	金丸 誠							
編集機関	千葉県教育委員会							
所在地	〒260-8662 千葉県千葉市中央区市場町1-1 TEL043-223-4129							
発行年月日	西暦2016年12月20日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かわしまいせき 川島遺跡	ちょうせいぐんちょうなんまち 長生郡長南町 さかもと 坂本522ほか	12427	007	35度 23分 31秒	140度 16分 13秒	20140106～ 20140303 20151026～ 20151113	10,750m ²	一般国道409号 茂原一宮道路国道 道路改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
川島遺跡	包蔵地 集落跡	縄文時代 古墳時代 奈良時代 古墳時代以降	陥穴	1基	土師器・須恵器 石製品		古墳時代後期後半 から奈良時代の堅 穴住居跡が検出さ れ、長南町内では 数少ない当該時期 の貴重な資料とな った。	
要約	丘陵上の標高56m前後の東向き緩斜面から古墳時代後期後半及び奈良時代の堅穴住居跡2軒と、縄文時代の陥穴1基、古墳時代後期以降の土坑4基を検出した。堅穴住居跡は2軒ともカマドを作り替えており、カマドは4基とも80cm以上の長い煙道部をもち、このうち3基はトンネル状に掘り込んで作られている。また、SI002からはカマド構築材である凝灰岩の切り石が出土した。							

千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告第16集

長南町川島遺跡

— 一般国道409号茂原一宮道路国道道路改築事業埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成28年12月20日発行

編集・発行

千葉県教育委員会

千葉県中央区市場町1-1

印刷

株式会社ライフ

成田市東和田595
